

叢說

時代の趨勢と史家の任務

文學博士 坂口 昂

世界史上最大の事變といへば、最近までは、何人も必ず先づ指をフランス革命及びナポレオン戦役に屈したのである。爾來世紀後の今日、吾々が國民として、人生の一員として、殊に世界史家として、最も痛切の利害を感じ、無限の興味を惹かなければならぬ世界的大變動が、再び吾々の眼前に進行し、否な吾々の雙肩に落ちかゝつて居る。

昨年開戦の當初から私はナポレオン戦役の再來を豫感した。而してその後殆んど一年半の経過は、いづれの點に於てもそれ以上に遙かに廣大複雑急激深刻なる振古未曾有の大衝突たることを證示し明かに時代の最大轉機を現はしつゝあるやうであ

る。かくの如き前後の世界史上の最大事變に伴へる時代の趨勢は、同時代に遭遇せる歴史家に如何なる感動を興へ、歴史家は翻りてその時代の史學的發展並びに實生活の變化に如何なる影響を及ぼすべきか、約言せば、時代の趨勢と歴史家の任務との關係如何、これ史學史上、文化史上の大問題であつて、はたまた廣義の歴史教育の上に、決して無用でないと思ふ、只僅少の時間が許されて居るのであるから極大體だけ演述する。

偕フランス革命は抽象的にいへば十八世紀に流行したる純粹の理論がその舊政治、舊社會を破壊した事變である。斯の大革命の風雲に乗じて生れたる天才的冒險兒は即ちナポレオンであつた。彼の歐洲に於ける出現及び成功は、最初の間こそ封建の打破、法治的政治の扶植てふ福音を齎したれ、時と共につまり諸國民傳來の權利を蹂躪し自己一人專權の天下一統政治を企圖するの外な

つた。故に大革命及びナポレオン時代とは、冷かなる頭腦と鐵血の暴力とが歴史上傳來を壓倒し、一本調子なる純理と唯一の權力との下に諸有る邦國を統一せんとする試みであつた。さればナポレオンの晩年、イスパニヤ及びドイツに始りたる對ナポレオンの反抗は、一方には傳來的正統君主の復古といふ主義となり、他方では傳來的權利を負へる國民の自由獨立といふ運動となりて、各々實現したのである。即ち是れ極端なる個性に對する傳來性、破壞力に對する保存性の反抗であつたのである。

この大なる對抗は十九世紀のすべての文化科學に取りて極めて意味深きものであつた。この記憶すべき時代にその學生及び青年生活を送つた一人歴史家ランケの晩年の懷舊談に『歴史的研究なるものは本とナポレオンの思想の單獨跋扈に對する反抗運動に胚胎發生したのである』とてそらゝに

當年を憶ひ起して居る。眞に然り而してこの所謂歴史的研究とは單に史學が歴史そのものを研究することのみを意味したのでなく、すべての學問上對象を歴史的に研究することを含著し、少くとも苟も文化に屬する科學は單に純理空論に一任すべからず、歴史的に事實の發展を基礎として之を研究し、之を組織すべしとの學風を指すのである。

この學風は獨逸に於て尤も盛んとなり、所謂獨逸の歴史派といふものがすべての文化科學の方面に勢力を占むるに至つた。試に見よ、文獻學に於てはグリム兄弟、シュレーゲル兄弟等の學才輩出し國民固有の傳説民謡、言語、文學を歴史的に探尋し所謂ローマンチック派の巨擘となつた。哲學にはフイヒテがある、彼れはナポレオンの隆盛時代に既に『現代の特相』を論じて歴史の時代の進行順序を立し、次に最有名なる『獨逸國民に』警告して古ドイツ精神を鼓舞し、歴史と國民とに關す

る哲學的思想を開陳した。之と同時に史學にはニ
ーブルが出た、彼れは夙にローマ民族の傳説の
うちにその國民性を求め、かの物質上の損失を精
神上に恢復すべく創立された伯林大學に於てその
結果を講述し、一方には現代史學の鼻祖となり、

他方には時代精神の喚起に貢獻した。かくの如く
文献學に於ても哲學に於ても、勿論史學そのもの
に於ても、等しく歴史的研究の風潮が並び開始し
た。換言せばナポレオン及び對ナポレオン時代が
作りたる偉大なる精神的氣分が出来て、かゝる空
氣のうちから陶冶されて獨逸の幾多の人材が輩出
されたのである。ランケは即ち上述の如くその一
人であつて、ライプチヒ大學を卒業するの間もな
く、一八一八年にフランクフルト・アン・デル・オ
ーデルのギムナジウムの教師となり、そこに居る
間にニーブルの風を紹ぎ、研究を積み、一八二四
年有名なる處女作『ローマ・ゲルマニ風諸民族の

歴史』を公けにした、即ち彼の翌年伯林大學轉任
の階梯こゝに出來たのである。この著固よりラン
ケの天才と努力とに歸すべきものなるも、一には
實に時代の産物である。それは表題の『民族』と
いふ一語が之を標徴して居る。

抑も民族性といふことはよく使用さるゝ術語で
ある、其他國民性、國民精神、時代精神ともいふ
やうな術語があるが、いづれもその起源を上述の
時代に發して居る。是等の術語は今日我國にても
吾々が使用して居るが其意義は漠然として捕捉に
苦む場合が多いやうであるが、之を對ナポレオン
時代に遡りて考察する時は頗る明瞭なる説明と教
訓を受けるのである。先づローマンチック派を見
るに、彼等は喜んで民族性、國民性を説き之を金
科玉條として居る。蓋しフランス革命及びナポレ
オン時代は或る意味に於ては單にギリシヤ・ロー
マの古典クラシツクに含まれたる理想の發現に過ぎない、同

時代の國民の起源發展を無視してすべてを理想的統一政治の下に拘束せんとした。然るに歐洲の國民の起源は古典時代に在らず、人種大移動頃に萌芽したのであつて、彼等は爾來各自固有の習慣を保持しながらローマ教會に歸依し、敬虔にして尙武的なる封建制度といふ一大社會生活を營み、そのうちから分れくに生れ出でたるものである。

是に於て文獻學者はナポレオン時代の風潮に反抗して、各國民又は各人民なるものには其起原の最初から各自の國民性又は人民性が存在し居る、國民的精神又は人民的精神があつて、それから發生したと主張し、而してこの性質又は精神は先天的根本的のものであつて萬古不易である、一定不變であるまで極言し、或一派の如きは大に國民性を美化理想化する傾あり、隨て國民の古傳説や古國語の研究、封建時代の稗史小説、羅馬舊教の恢復興隆等に耽けることになつたのである。か

ゝる國民的復古思潮が對ナポレオン及び王政復古の時代に實證確認されて隆盛となつたのは偶然でない。その狀猶ほ同時代の我が徳川時代末期に於ける國學並に勤王論の勃興に似通ふておるやうである。ローマンチックといふ術語は、今日我國に於ても西洋に於ても、動もすれば或る墮落した末節の意味に用ゐられて居るが、その本來の意義は上述の國民的人民的確信に立つた精神的文學的思潮に在るので、其風十九世紀の前半までは小説にも美術にも法律にも宗教にも歴史にも現はれ、すべての社會の流行となつたのである。轉じて哲學者を見るに、彼等は世界には絶對最高の精神があり、一定の設計がある、一定の設計とは一定の段階をなして、一の時代から他の時代へと進み行くやうに絶對的に攝理が出来て居るのである、而して各時代には世界精神がその時代精神となつて現はれて居る、人生はこの設計に従ひて一定の順序

を逐ひて進歩し各時代精神を現はしつゝ、一定の大目的に向つて進行到達しつゝありとして居る。かのフイヒテの『現代の特相』は即ちそれである。殊にヘーゲルの歴史哲學はそれである。ヘーゲルはフイヒテよりも長く生存し大に活動し後進を指導したるが故に、その歴史觀の影響は實に偉大なるものがある。然るに史學に於ては歴史家はローマンチック派並に精神哲學派と共通の雰圍氣を味ひ相互助成を自認しながら、而も前者の國民性人民性觀にも賛成せず、後者の世界精神と時代精神觀をも未だ肯諾し得ないのであつて、或る一時代を通じてその間に卓越貫通する有力なる思潮を求めやうと努力する。このものはローマンチックの主張する古來先天的に定りたる萬古不易の精神にもあらず、哲學者の所謂永久に絶對に豫定されたる世界精神にもあらず、例へば大革命時代を通ずる革命思想、ナポレオン時代を通ずる統一思想の如

き、又その後に起りたる復古思想や國民思想の如き、いづれも事變の發展進行そのものを考察してその裡に於て大勢を支配する最有力なる思想を捕捉し、之を以て時代思潮と名づける *die herrschenden Ideen, ruling ideas*。このものは古來の傳來的勢力によりて、必ずしも一から十まで全然豫定されたる前途を馬車馬的に辿りゆく運命を有つて居るものでない、古來の傳來性と現在起りつゝある創見的活動的新勢力との相互關係によりて生ずるもので、隨て人間の自由意志の力をも認めたものである。

之を教育上より考ふるに、管見によれば、ローマンチックの國民性觀、哲學者の世界精神又は時代精神觀は、文學者、道學者、宗教家が一般民衆を指導する上に於て最も適當であらう、隨て教育上に於ても下級生に對しては或は然らむ、又は國

史教育の上には或は必要な觀照であろう、併し
上級生に對しては、社會に於て廣く大に活動せん
とする青年者に對しては史學の時代思潮觀が最も
適當であると思ふ、何となれば國民性が萬古不易
である、世界は一定の進歩の階段が豫定されて居
るといふ思想は、或る場合には人をして高遠の目
的を逐はする、一種の動力たるべき信念として頗
る尊重すべきものであるやうであるけれども、こ
かく個人の自發的傾向を制限し、その個性的努力
を萎靡せしむる處がある、若しかゝる學說が實際
となつたならば、その極萬事宛も運命に支配せら
るゝ如く凝結固定して何等個性の自由活動を許さ
ず、人間は或は失望落膽して、神經衰弱又は自暴
自棄となり、若くば放肆驕慢に流れて或は誇大狂
となり、共に國家社會の爲めに進で眞の努力を致
す能はざるべし。人生の歴史は一の發展である、
國民性も時代精神も皆然り、現在は過去からの發

展である、これと同じく未來は現在の發展如何に
繫つて居る、それ故に現在の個人、現在の社會は
過去の傳來を負ひ未來の爲めに大に努力を要すと
説く方が、現代の奮闘的生活の要求に痛切に適合
して居ると自分は確信する。此意味に於て歴史教
育は自然の副産物として優に活動的修身科の位置
を取り得るものであつて、歴史家たるものは治國
平天下齊家修身の道を單に倫理哲學政治法律の人
のみの壟斷に歸せしめず、自分の史學的立場を失
はざる限り、必要の場合には自ら進んで之を呼號
すべき任務がある、否な權利がある。

話跡に返りて、して見れば國民性、時代精神等
の解釋はローマンチック、哲學、史學各その觀照
を異にして居るが、而も是等の概念はいづれも對
ナポレオン時代に起りたる、よしやすべてが史學
的でないにしても、すべてがともかく歴史的考察
の産物であつたのである。そこでこの學風が當時

の學術の勃興並に實際生活の進展に及ぼしたる影響を攷ふるに實に偉大なるものがあつた。

他の學術のことは暫く措き、單に史學界につきていはむに、先づこの種の概念は他の古の時代に應用せられてその歷史上發展を闡明したる事例一二に止らない。例へば對ナポレオン時代及びそれ以後を捕捉したる概念の一たる『對革命』*contre-révolution*, *contre-revolution* は、やがて十六・七世紀の教會改革に對する反働運動に適用されて、茲に始めて『對教會改革』*contre-réformation*, *counter-reformation* といふ概念が作られたのである。一体十六世紀中葉以後に起りたる對教會改革の運動は、各地各所に於て個々別々に觀察され、何等の統一的世界的運動としての概念を構成して居らなかつたのか、それが遂に全歐洲を通じての大運動といふ概念を組立つるに至つたのは、ランケの『羅馬法皇史』及び『教會改革時代の獨逸史』の功

多きに居り、即ち時代及び時代の產物たる歴史的研究の賜である。又た古代史に於て有名なる『ヘレニズム』てふ世界的文化の概念が歴史家ドワイゼンによりて確立されたのも亦た同様である。凡そ歷史上の廣大なる運動又は状態は、動もすれば當時の同時代の人士の自覺に上らないことがあつて、後世の歴史家始めて之を捕捉したる場合少しとせず。若し爛眼なる歴史研究家あらば、同時代進行中の世相時運に對しても或はよく之を捕捉して適切なる概念を下し、同時代人士の自覺を喚起し得べきであらう、是れ歴史家の常に注意すべき點である。

次に實生活に對する影響を見るに、一八三〇年以後に起りたる歐洲の諸革命に關係したる有力者は、多くは政治家、政論家にして歴史家、歴史家にして政治家政論家であつて、こは單に獨逸に限らず、英佛に於ても同様の傾向があつたのを見て

も分明である。殊に注目すべきは一八四八年の革命と史學との相互關係である。かのニーブール、ランケの創始した史學は、此時までに既に多少時事を動かすの功果を有したけれども、此時ほど直接に痛切に之に關係することはなかつた。此頃及びそれ以後、ランケ派の中には老師の公平靜謙虚なる態度に慊らず、客觀的批評的研究から取得したる歴史を基礎として時事の現實的要求に應せんと試むる者が起つた。歴史家ジーベルが從來の態度を一變したのは即ち此危機である。彼れはランケ派として修養したる所のものを以て、權力の史家ドロイゼンと同じく、普漏士亞國家の爲めに鞠躬努力することゝなつた。かくの如くして爾來ランケ派の内からして時事の要求と呼應提携する現實的歴史派⁽³⁾とも稱すべきものが起つた。この派は國家を至上最高の生命と認め、そのものゝために史學を應用せんとするものであつて、遂にかの

政論家にして詩人と豫言者との資質を兼備する歴史家トライチケに至て、この運動の絶頂點に達した。併しランケ派の内⁽⁴⁾に於ても依然としてその史風を保持しながら頗る愛國的色彩の顯著なる人がある。Oegenrotheはその巨擘である。彼は太學教授となるまで、最初二十年間伯林のヨアヒムターレル・ギムナジウムの上級教師として歴史を講じ、その結果は一八五五年以後『獨逸の皇帝時代の歴史』⁽⁵⁾となつて公けにされた。彼れはランケの愛弟の一人として堪能なる研究家であるが、而も研究家としてよりも青年に對する歴史の叙述家として多大の成功を收めたのである。彼れの説述した内容はその表題が再び之を示して居る。皇帝はその時にはまだ實現して居らぬ、昔は神聖羅馬皇帝として獨逸の上に君臨し國民の光榮を八肱に輝かした。ギーゼブレヒトはこの今昔の感慨を胸底に潜めて、當年のオットー大帝や、フリードリヒ

赤髯の時代を巧妙に雄麗に物語つた。この講義とこの書が獨逸青年の間に鼓吹した思想の影響頗る偉大であつた。畢竟ギーゼブレヒトの歴史は客觀的研究を加味したる日本外史の如きものであつたと思はれる。然らば則ちジール以下ギーゼブレヒトに至るまでの歴史家の活動を綜合するに、獨逸國民の勃興てふ實生活は史學の研究に負ふ所多大なりといはなければならぬ。

之を要するに、對ナポレオン時代の趨勢と史家の任務との相互關係は頗る密接緊要なるものがある。世界的大勢なくんば史風の發展なく、史風の發展なくんば世界的大勢は根據ある解釋と有力なる指導を缺いたのである。然らば對ナポレオン時代よりも重且つ大なる現下の對カイゼル時代なるものに對しては如何。

茲におのづから二個の問題が起る。(一)大戰亂を中心とする現今の趨勢如何、(二)之に對する史

家の任務如何。第一問は實に廣大にして吾人殆んど茫然自失の感なきを得ないが、未だ容易に之を捕捉しねないのを憾とするも、而も少くとも國民的國家の世界政策を實行せんとする軍國主義と、一般民衆の安寧幸福を主張する社會的平和主義との對抗となりつゝあるは確實であつて、そのいづれが果してランケ派の所謂世界を支配する時代思潮となるべきかは、本戦局の結果を待つの外がない。第二問に對しては、現今の趨勢がいづれに向ふにしても、比較的容易に答へうる、即ち對ナポレオン時代の結果と同様に、對カイゼル時代に刺戟せられて茲に歴史的研究は再び大に興りつゝあり、否な起らなければならぬ、隨て吾々は歴史家として現下の史學及實生活に對して十分の覺悟を抱き多大の努力を致すべき秋であるといふこと是れである。

これを吾が同盟國に見るに、英人は今回始めて

普漏士亞と開戦して最も苦き經驗を嘗め、目下遅
蒔ながら、自己國民性發展の缺陷を反省し、獨逸
國民性及びその一切の發現の研究に着手したやう
である。彼等は由來歴史を尊重する國民と稱せら
れて居る、しかし彼等の歴史觀は只ギリシヤ・ロ
ーマの古典時代クラシックと自國の憲法上及び通商植民上發
展のみを中心とする歴史ばかりを基礎とするもの
であつて、自己の利害に直接關係の淺少らしく見
ゆる大陸の近代史の大部分を閑却し、そこに神聖
ローマ帝國グランドてふ大理想の傳來とホーエンツォルレ
ルン家の軍國主義との存在することは、少數の先
覺者を除くの外は、一般公衆は勿論而も比較的教
育ある上流人士にも、十分理解自覺されなかつた
今回英國人を狼狽させた獨逸帝國の原動力は、實
に中古以來の大理想と普漏士亞軍國の規律とに外
ならぬ。近著のタイムスを始とし英國の言論は屢
々英人の自戒反省の證跡を明示し、之を約言する

と、吾々がギリシヤから傳へた國民の自由主義は
吾々をして律規を缺いた個人主義に奔らしめ、ロ
ーマから受けた世界的帝國主義は吾々をして島國
（海上）的自足偷安の状態に陥らしめたこと、歴々
今日恐慌の偶然でないことを自諷自警して居る。
私をして自己の乏しき經驗と研究とにより忌憚な
く言はしめば、英國紳士の腦裡に收めたる歴史觀
には、歐洲史の大部分に關しては、古典時代から
近代までの約一千年以上の白紙が夾まつて居るの
である。それだから、かれの如く昨年開戦以來ベ
ルンハルデグランドだのトライチケグランドだのと今更の如く騒ぎ
始めたのである。英人も今度といふ今度始めて眞
身に廣く深く世界の歴史に留意することになるで
あらう。

翻て我が日本を顧るに、是れ亦た今後益々大に
内外の歴史的研究をなすの必要があると思ふ。内
に於ては今回擧げさせられたる御即位式に磅礴せ

る精神を窮めることも大なる必要である、外に於ては廣く歐洲戰亂の行衛に注意することは勿論、

(本編は去十二月開る會の中等學校地理歴史協議會に於ける講演の概要なり)

特に我國と文物、政治、通商上最も密接の關係ある國土及人民の歴史とその性質とを研究し、萬一の際、今回英國が周章狼狽したるが如き同じ醜體を繰返さざるやうに力めんければならぬ、この點に於て最も吾人の注意を惹くべきものは歐洲列國關係の外に於ては支那と印度と米國との三者であらうと思ふ。苟も歴史家たるもの、その研究に従事すると直接に少壯國民の教育の任に當ることの別なく、又た昔時を談ずると現代を説くことに論なく一意史學の見地に立ちて世界史的觀察を下し時代の趨勢を捕捉し、以て一には史學の權威を高め、一には人心の啓發國家社會の進運に貢献するを要し、随つて自ら深く修養を積み尤も適實なる方法を取ることに専心注意したいものである。

- (1) 坂口昂 編帝と泰翁(大正三年八月大阪毎日新聞)
- (2) Rankin, T. Report vom December 1875 (S. W. 53-54, Le-bensgeschichte S. 47)
- (3) Fichte, Die Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters 1806 Reden an die deutsche Nation 1808.
- (4) 坂口昂 古代史研究の發展に關する(史的研究所) Niebahr, die römische Geschichte, I. A. 1812.
- (5) 坂口昂 フォイテランケ(藝文大正三年一月)
- (6) Rankin, über die Epochen der neueren Geschichte: Vorwort von Dove 1888, und Erster Vortrag (1854). Elkan, A. Entstehung und Entwicklung des Begriffs "Reformation" Hist. Z. 1914.
- (7) Reuter, Gesch. der neueren Historiographie, München 1911. VI. Buch : Die rechtliche Reaktion, SS. 529-530. (Mitschrift, fälsch. der deutschen Kaiserzeit, 1855. Bd. I. Vorrede zur I. A.)
- (8) 坂口昂 獨逸帝國思想の由來(史學雜誌大正四年六月) Times Weekly, Sep. 10-1915, Literary Supplement : The Conflict of Ideals. Nineteen Century and After, July 1915 : The Secret of German Strength by Ellis Parker. Preussische Jahrbücher, 1915 : Emil Daniels, Die englischen Historiker und die deutsche Politik.
- (9)
- (10)